「僕」と「私」の弁証法

――村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論――

平沼　慧幸

はじめに

村上春樹は、多くの小説を一人称で書いてきた。その時に選択された語り手（主人公）の一人称は〈僕〉であった。デビュー作の「風の歌を聴け」を含めた鼠三部作を始め、多くの短編でも語り手の一人称は〈僕〉であり、三人称の小説であっても主人公であるとみなせる人物の一人称は、〈僕〉であることが多い。この〈僕〉という一人称と、その特徴的な文体から村上春樹の小説は「僕小説」と言われてきた。[1]

そうした一人称〈僕〉を使い続けてきた村上春樹にとって、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の構造は何を意味するだろうか。この〔ハードボイルド・ワンダーランド〕と〔世界の終り〕という二つの世界が交互に進む小説は、それぞれ、〈私〉と〈僕〉の二つの一人称によって語られる。この小説から初めて〈私〉という一人称が導入されたのである。

だが、こうした注目のされ方自体が村上春樹の小説における固定化されたイメージを物語っている。日本語にとって、一人称を使い分けることは自然なことではないだろうか。日本語の人称の変化は、相手との待遇関係に依存している。相手の性別・年齢や、場の状況・雰囲気によって、どの人称が適切であるかが決まる。これに対応するために日本語は、他の言語と比べて一人称を多く持っている。[2] 相手に応じて適切な一人称を選ぶとは、自己を他者の立場において眺めることだ。日本語で一人称を選択するということにつ

いて、石黒圭は、聞き手・状況、アイデンティティに関わるとし、「自分が周りからどのように見られたいか、自分を社会的にどのように位置づけたいかという心理が一人称の選択につながっている」と述べている。次にあげる男子大学生の一人称の変化は、一人称の変化によって自己の位置づけも変化することをよく表している例ではないだろうか。

> 場面によっても、一人称表現は変化するものです。たとえば、サークルでは「おれ」、ゼミでは「ぼく」、就活では「わたし」と場面に合わせて一人称は変わります。サークルでは気を使わずに済むので「おれ」、ゼミでは先生や先輩を立てるために「ぼく」、就活では社会人として適切に行動できることを示すために「わたし」を選んでいるのです。[3]

周りからの視線・社会的な位置づけを自己確認し、どのように自分を見てもらいたいかを反映させるのが日本語の一人称なのだ。つまり、日本語の一人称は他者意識の表現なのだ。だが、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は〈私〉という一人称の使用の新奇さから、その一人称がいかに使われているかは問われず、単なる二つの世界の指標として読まれてきた。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕と〔世界の終り〕がそれぞれ、「私」／「僕」の対立として意味づけられてきたのだ。[4]『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、それまでの「僕小説」からの転換とみなされてはきたが、一人称〈私〉の使用のされ方についてまでは言及されてこなかった。[5]だが、この小説における一人称の意味を考える上では〈私〉／〈僕〉の他者意識の違い、一人称の使用とその文脈を問うことが欠かせないだろう。小説中の一人称を見ていくと、一人称〈僕〉／〈私〉は単に二つの世界を見分ける目的で使われているだけではないことが分かる。

本論文では、この一人称という観点から『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を分析し、その一人称の使用から、「私」の他者、そして自己意識との関係を考察する。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における〈僕〉／〈私〉の一人称がいかに使われているか

を論じることで、小説の構造と一人称の関係を明らかにする。なお、以降は人称代名詞を意味する場合には〈私〉、登場人物を意味する場合には「私」として区別する。加えて、登場人物と語り手のレベルを区別するために、語り手を意味する場合は、語り手**「私」**と表記する。

一、語り手における一人称の位相

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、二つの世界が交互に進むという構成が特徴的だ。どちらの世界も一人称視点による物語だが、視点人物である語り手の名前は明かされないことから、〈私〉と〈僕〉の一人称に世界を代替させ、意味付けるように読まれてきた。だが、そうした読み方は二つの世界を単純化するものであり、人称の機能を切り捨ててしまうものだ。ここではまず、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の一人称に着目し、語り手**「私」**の一人称の使い方について考えてみたい。

計算士である「私」の一人称の語りによって展開する〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の世界は、「私」の物語として捉えられてきた。だが、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の「私」の一人称に注目すると、すべての文で〈私〉という一人称が使われているわけではないことが分かる。次の引用は、どちらも「私」の発言を含むものであるが、「私」の発言中での一人称は〈僕〉が使われていることが見て取れる。

「まあそういう考え方もあるにはある」と私は言った。「でも僕が言っているのはごくあたり前という意味なんだ。…」（第5章）

「僕も図書館につとめればよかったんだ」と私は言った。ほんとうにそうするべきだったのだ。（第35章）

このような一人称の使い方は、〔ハードボイルド〕の世界では、いくつも見られるものだ。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は〔ハードボイルド〕では〈私〉、〔世界の終り〕では〈僕〉と、単純には分けることのできない構造がある。つまり、この引用にあるように〔ハードボイルド〕の語り手**「私」**は、地の文の語りでは〈私〉を、

会話文の語りでは〈僕〉を使うことで自己の一人称を使い分けている。この語り手**「私」**の一人称については、すでに先行研究でも言及されており、ジェイ・ルービンは次のように述べている。

> 語り手としての「僕」と「私」は峻別されている。しかし「私」のほうはほかの登場人物たちとの対話の中では若い男性が一般的に用いる「僕」を使っている。終盤で二人の語り手が合流をし始めるにつれて、これはきわめて重要なことになっている。「いったい僕はどうなるんですか？」と「私」が博士に迫るとき、「私」は事実上もうひとつの世界の「僕」の行く末を問うているのだ。[6]

ルービンは〈僕〉という一人称を通じて、小説の二つの世界が互いに関連していると述べている。その指摘は、二つの世界の関係を考える上で非常に重要である。しかし、〔世界の終り〕と関係づける前に〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の世界の中で、二つの人称の使われ方を分析してみる必要があるのではないだろうか。なぜなら、〈僕〉という一人称は終盤に限らず至る所で見られるものであり、それが生じる箇所も地の文と会話文での使い分けが見られるからである。そこで、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の世界内で、語り手**「私」**が二つの一人称を使っていること、人称の位相についての意味付けを試みていく。地の文と会話文では何が異なるのだろうか。その二つの文の性質の違いについて、石出靖雄は、発言の受け手という観点から次のように述べている。

> 語り手が物語内容を語る際、作中人物の生の声をそのまま挿入することはごくふつうである。しかし、語り手の語りと作中人物の発言とは性格がかなり違うものである。もちろん表現主体が違う。受け手についても違いがある。語り手の受け手は想定される聞き手であるが、作中人物の発言の聞き手は作中の人物（発言者自身も含む）である。[7]

語り手とは地の文での発話者のことであるが、語り手と作中人物ではその受け手（聞き手）が異なる。作中人物の受

け手はその物語内を出ることはない作品内の人物だが、一方で語り手の受け手は物語の外に想定されるのである。加えて、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕は、語り手「**私**」による一人称の語りによって進む。それは「私」という作中人物が同時に語り手という役目を兼ねているということを意味する。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の語り手「**私**」は物語の聞き手に対しては〈私〉で、作中人物に対しては〈僕〉というように語る自己を分けている。そのことは語り手としての自己である〈私〉と、作中人物としての自己である〈僕〉が人称によって区別されていることを示している。

語り手「**私**」にとって一人称〈私〉か〈僕〉かの選択は、聞き手に対して見せる自己を変える行為であり、それは相手に対してふさわしい自己を語ることであった。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の語り手「**私**」は、どういった自己を語るかについて、二つの一人称を持っていた。その使い分けは、他者に対する自己意識に根差したものなのだ。地の文の〈私〉という人称は、その「想定される聞き手」であるテクストの外にいる読者へと向いている。〈私〉による語りはこの世界を説明し、その内容をこの世界の外にいる聞き手＝読者へと届けるのだ。次の箇所は、読者を意識し、一人称の〈私〉を使っているた語り手との立場がよく表れている箇所ではないだろうか。

これが洗い出しだ。ごく簡単に言えばそういうことになる。転換のコードは計算士によってそれぞれ違う。このコードが乱数表とまったく異なっている点はその図形性にある。つまり右脳と左脳（これはもちろん便宜的な区分だ。決して本当に左右に分かれているわけではない）の割れ方にキイが隠されている。図にするとこういうことになる。（第3章）

テクストには、語り手「**私**」が説明した脳のイメージ図が挿入されている。その図は、登場人物としての聞き手ではなく、テクストの外の聞き手である読者に示されたものである。こうした語り手「**私**」にとって一人称〈私〉で意識される自己とはいかなるものだろうか。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の世界で、「私」が従事している職

業は計算士だ。計算士とは、この物語世界で『組織（システム）』という文字通り組織に属するエージェントである。語り手**「私」**がこの『組織（システム）』に所属しているという意識は、自分を含んだ「我々」という言葉からも分かる。

> 我々の組織は一般に『組織（システム）』と呼ばれ、記号士たちの組織は『工場（ファクトリー）』と呼ばれている。（中略）我々末端の計算士は税理士や弁護士と同じように個人で独立して仕事を行うが、国家の与えるライセンスが必要だし、仕事は『組織（システム）』あるいは『組織（システム）』の認めるオフィシャル・エージェントを通してまわってきたものしか引き受けてはならない。（第3章）

計算士である「私」は、国家資格を持つ組織の一員であり、語り手**「私」**の「我々」という言葉はそのことへの自覚を示している。会話文中でも語り手**「私」**は〈私〉という一人称を使うことがあるが、その多くが「私」の依頼主である博士に対して使われていることは偶然ではない。「博士」と対話するときの語り手**「私」**は、あくまで『組織（システム）』の一員としての自己なのである。つまり、『組織（システム）』から正式に来た依頼を行う自己として、公の自己が〈私〉なのである。

> 「私のランクはダブル・スケールですが、それはよろしいですね？ ダブル・スケールというのは――」
>
> （中略）
>
> 「この依頼書類をひととおり全部カラー・コピーして下さい。それがないといざというときに私が非常に困った立場に追いこまれることになりますからね」
>
> 「もちろんですとも」と老人は言った。（第3章）

「私」は博士と計算の方法や契約について話す。語り手**「私」**が一人称〈私〉として自己を語るのは、博士に対してはそうした自己が適切であるからだ。「私」の一人称を見ていくと、〈私〉／〈僕〉の区分は計算士としての仕事を基準に分けられていることは明らかだ。博士の孫娘であるピンクの太った娘に対して、語り手**「私」**は〈僕〉で語っている。また、図書館のリファレンス係りの女性に対する一人称も、一貫して〈僕〉である。語り手**「私」**の公私の区別

は、その一人称によって表れるのだ。計算士としての公の自己＝〈私〉とプライベートな自己＝〈僕〉は、「私」にとってきれいに割り切られている。語り手**「私」**は読者に向けて計算士としての自己＝〈私〉で語っているのだ。

二、混在する〈私〉と〈僕〉

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の語り手**「私」**には、語り手と登場人物という立場の違いによる人称の区別があり、それぞれが地の文における〈私〉と、会話文における〈僕〉という人称に対応している。この〈私〉には、計算士としての公的な自己としての意識が反映されていた。この人称の関係が崩れることは基本的にはなく、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕では、〈私〉と〈僕〉の関係は安定している。

しかし、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の世界には、語り手**「私」**の〈私〉と〈僕〉の一人称の関係が崩れている箇所が局所的に存在している。次の引用は、「私」が太ったピンクの娘とともに、地下世界へと博士を救出しに進もうとする部面である。この前後では、語り手**「私」**における〈私〉と〈僕〉の人称の関係が守られている一方で、ここでは地の文であるにも関わらず、一人称が〈私〉ではなく、〈僕〉が使われているのだ。

> 太った娘は僕の顔をじっと見て、それから肩をすくめた。
>
> （中略）
>
> 「ふうん」と私は言った。「君のおじいさんは『組織』を辞めるときに、僕の個人的なデータをコピーして持ち出したりはしなかった？」（第17章）

このような一人称の使い方はそれまでの使用から逸脱するものであり、安定した人称の関係が崩れ、一人称が混在している。こういった地の文での〈僕〉という人称を、人称の混在とする。複数の一人称の使用は、地の文に限らず会話文でも見られるが、会話文での〈私〉の使用のほとんどはその聞き手が博士に限られること、その会話文での〈私〉に比べて地の文での〈僕〉が三例だけと少ないことから、ここ

では地の文での〈僕〉のみを一人称の混在として扱う。こうした一人称の区分を逸脱するような混在が、いかなる箇所で表れているのかを考えねばならないだろう。

語り手**「私」**にとって、一人称の〈私〉は計算士としての自己であり、公私の領域が〈私〉／〈僕〉によって分けられていた。だが、博士の依頼を受けてから「私」は記号士に襲われ、『組織（システム）』を裏切ってしまう。この記号士が「私」の部屋へ侵入することは象徴的だ。記号士たちが部屋に入ってくるとき、部屋のドアを壊す。まさに、私的空間と公的空間の境界が崩壊する。記号士とは「私」が所属する『組織（システム）』と敵対する『工場（ファクトリー）』の一員であり、「私」の計算士という仕事――公的領域が、私の生活の空間にまで押し寄せてきている。そういった公私の境界線の揺らぎは、「私」の自己イメージである一人称に生じる。「私」は記号士に〈僕〉で話しかけていたが、一部は〈私〉となっているのだ。

「私が処理したあの博士の実験データは私を呼び寄せるための餌であって、実質的には何の価値もないものだったということになるね。博士の目的が僕を呼び寄せることにあったとすると」（第13章）

語り手**「私」**は記号士に対して、公と私のどちらで自分を表すか分からなくなっている。「私」のそれまでの公私の境界の緩みがこの〈僕〉と〈私〉の混在なのだ。計算士としての領域とプライベートな領域の境界の崩壊を象徴するように、「私」の部屋は記号士によって破壊される。「私」の服、ウィスキー、食器、テレビなど「私」の私的な空間を構成していた部品は、記号士――「私」の公の領域の刺客によってすべて壊されてしまう。加えて、「私」が『組織（システム）』を裏切った以降の物語後半で、語り手**「私」**が「博士」と話す時に、〈私〉という一人称よりも〈僕〉が多く見られることは重要である。

「あなたは私に数字をわたしてシャフリングをやらせましたね？ あれにはどういう意味があるんですか」

（中略）

「じゃあ僕の第三回路は開きっぱなしになっているのですか」

「まあそういうことですな」

「でも、僕は今こうして第一回路に従って思考し、行動していますよ」（第25章）

語り手**「私」**は初めて「博士」に会ったとき、計算士としての自己＝〈私〉を使って話していた。だが、計算士ではなくなってしまった今では、博士に〈僕〉という個人としての人称も使っている。一人称に表れる自己とは、自己が持つイメージと想定される他者の視線を内面化した自己とが入り混じったものだ。「私」がそれまで持ってきた公私の境界が崩れてしまった今、語り手**「私」**は自己のイメージを明確に持つことができないでいる。〈僕〉に混ざる〈私〉、〈私〉に混ざる〈僕〉とはそうした不安定な自己イメージを意味する。こうした境界の揺らぎが、一人称の揺らぎとして表れているのだ。「ハードボイルド・ワンダーランド」の語り手**「私」**にとって、〈私〉とは計算士としての公の自己であり、〈僕〉は私的な自己であった。そうした一人称の使い分ける境界が揺らぐことは、自分のイメージがあいまいとなる出来事と関係していた。記号士との会話や、後半での博士との会話がそれである。では、地の文での一人称の混在は何を意味するのだろうか。語り手**「私」**の地の文における、一人称は通常は〈私〉であるが、一人称〈僕〉が混在している箇所もあった。先ほどあげた一人称の混在の例をもう一度引用する。

太った娘は僕の顔をじっと見て、それから肩をすくめた。（第17章）

この「僕の顔」という言葉においてのみ一人称が混在しており、それ以外の前後の一人称は、地の文／会話文で〈私〉／〈僕〉の使い分けがなされている。一人称が混在しているこの箇所について、重要な点は二つある。一つは、〈僕〉という一人称が生じているのが身体の中でも「私」の顔であることであり、もう一つは、一人称が混在しているこの時、「私」の顔はピンクの太った娘に見られていることである。身体の中でも、自己の顔は自分で見ることのできない部分であり、身体のイメージを自分一人では持ちにくい。自分の顔は、鏡や他人の顔に出る表情などを通じて間接的

にしか知ることができない。自分の身体でありながら、その身体の統合に逆らい、他者としての性質を最も強く突き付けてくるものが顔である。顔とその所有について、鷲田清一は次のように述べている。

顔がもし所有の対象であれば、ひとはそれを思うがまま自由にあやつれるはずだ。実際、所有権をめぐり西欧の思想史のなかでも、「所有」という観念は、つねに「自分の意のままにしうること」という観念と等値のものとされてきた。（中略）顔はだれかが思うまま自由に管理・統制しうるものではない。顔において、わたしはその主人ではない。いやむしろ、顔はわたしの意のままにならないものの典型ですらあるのではないか。[8]

「私」が身体を所有していることへの不確実さを突き付けてくるものが「私」の顔なのであり、身体についての「私」のイメージは顔を通じて揺さぶられる。地下から帰った「私」は、久しぶりに見た自分の顔を「他人の顔」のように感じている。「私」が博士を助けに向かった地下世界では光がなく、「私」は身体のイメージをうまく持つことができなかった。それが「私」の顔の疎外化として表れているのだ。

私は目をあけて、両手で顔をこすった。久しぶりに顔を洗って髭を剃ったせいで、顔の皮膚は乾燥した太鼓の皮のようにこわばっていた。まるで他人の顔をこすっているみたいだった。（第31章）

「私」の身体への制御をすり抜け、自分ではないものへと容易く移り変わってしまうものが顔なのだ。一人称の混在は、こうした「私」の身体表現と密接にかかわっている。語り手**「私」**が使う一人称がそれまで用いてきた〈私〉から〈僕〉へと変わっている箇所は、「私」の身体のイメージが崩れる箇所なのだ。それまでの身体のイメージが揺らぐ場所で人称は混在する。だが、顔自体がそうした「私」の意のままにならないものであるならば、どうしてこの箇所だけが一人称が混在しているのだろうか。この「僕の顔」の箇所でもう一つ注目すべきことは、「私」の顔はピンクの太っ

た娘によって見られているということである。顔とは自分では見ることのできないものであり、自分の顔を把握するためには、その顔を見ている他人の顔を見るしかない。つまり、自分の顔は常に他人の視線にさらされることになる。こういった視線と身体の所有との関係について、市川浩は次のように述べている。

> 他者に見られている私は、奇妙な存在です。それは確かに私でありながら、私の自由になりません。他人が私をどう見ているかは私にはわからない。見られている私はある意味では他者の自由にゆだねられ、いわば他者に所有（他有化）されています。（他有化）をあらわすヨーロッパ語は〈疎外〉とも訳されます。他人に見られている私は、私でありながら私自身に疎外され、私の自由にならないものになっている。[9]

身体の中でも顔は、私の意のままにならないものの典型であり、「私」の顔は、娘から見られることで他者のモノとして所有され、私の自由にならないものとしてさらに際立ってくるのだ。自分の顔は他者を通じて知るしかないが、自分の顔がどう見られるかは、自分の自由にはならない。身体において、その対自と対他のイメージの違いがもっとも現れるのが、見られている顔なのだ。「私」は、図書館のリファレンス係りの女性とも、似たような経験をしていた。

> 「ところであなた本当は野球選手か何かじゃないの？」
> 私は驚いて飲みかけていたウォッカ・トニックを思わず胸の上にこぼしそうになった。
> 「まさか」と私は言った。「野球なんてもう十五年もやったことないよ。どうしてそんなこと考えついたんだ？」（第9章）

「私」は野球選手とは全く関係ないが、顔は「私」の持つイメージを裏切っていく。この箇所は、「私」の身体の所有の揺れが出ている部分である。それは、自分が今まで持ってきたイメージが他者のイメージによって裏切られ、対自と対他の身体の境界が揺らぐことにほかならない。

この一人称の混在とは、語り手として使用してきた〈私〉の地平に、作中人物として物語内で使ってきた〈僕〉が混在することである。語り手**「私」**は、語り手と作中人物のそれぞれのレベルで異なった人称関係を使い分けてきたが、それは地の文の聞き手である読者には、〈僕〉の面では語らなかったことである。語り手**「私」**が読者に見せようとしてきた側面が〈私〉であるなら、隠してきた側面が〈僕〉だということだ。語り手**「私」**の読者には見せるつもりのなかった面が出てしまったのが、この〈僕〉の混在なのである。それは、冒頭から表れていた。博士にやみくろのことを急に言われた語り手**「私」**は、人称を混在させている。

「あんただってやみくろにばったりこんなところで出くわしちゃたまらんでしょうが」と男は言って、巨大な声でふぉっふぉっと笑った。

「まあそれはね」と僕も調子をあわせて言った。やみくろにせよ何にせよ、こんなまっ暗なところでわけのわからないものになんか会いたくない。（第3章）

語り手「私」にとって一人称の〈私〉とは、計算士としての公の自己であった。そして〈僕〉とは、語り手「私」のプライベートな自己であった。つまり、二つに使い分けられていた自己との関係に亀裂が生じるとは、語り手**「私」**に私的な「私」＝一人称の〈僕〉が混ざることである。そのことは、語り手**「私」**が〈私〉という側面で自分を読者に示してきた位相に、〈僕〉というもう一つの側面があることも意味する。〈私〉として語ることへの逸脱によって〈僕〉が生じる場所が、「私」の身体へのイメージからずれる他者であり、また身体を所有することへの不確実性を突き付ける顔なのである。一人称の混在によって身体所有の揺らぎが表れているのは、人称自体がその人物固有のものではなく、他者によっても使われる相互的なものであり、人称を使うとは、他者の身になることでもあるからである。その点は、身に着ける衣服と似ている。服とは、誰によっても着られるものであるが、着ることにより自分を表現するものでもある。一人称の〈私〉や〈僕〉も自分固有のものではなく、誰もが使うことのできる交換可能なものであ

る。人称的な自己とは、こうしたさまざまな人称を使うことで、その人称構造の網目の中に遡行的に浮かび上がる自己なのだ。

こうした不確実な身体の所有に関する人称の混在は、「私」の顔だけに留まらない。「私」が着る服についても同様である。「私」は地下世界から脱出したのちに、スーツを買うが、その既製品のスーツは「私」だけではなく、誰もが着ることのできるものだ。そういった一般性と対比されることで、「私」自身が生じてくる。

きちんとした姿勢をとってみると、ブレザーコートの左の袖が右よりも一センチばかり短いことが分かった。正確には服の袖が短いのではなく、私の左腕が長すぎるのだ。どうしてそうなったのかはよく分からない。私は右ききだし、とくに左腕を酷使した覚えもないのだ。

（中略）

「野球のようなものをどこかでやっておられるのですか？」と店員はクレジット・カードの控えを渡しながら私に訊いた。

野球なんかやってない、と私は言った。

「大抵のスポーツは体をいびつにしちゃうんです」と店員が教えてくれた。（第３３章）

衣服という他者の基準を「私」が身にまとうことで、自分の姿が浮かび上がる。衣服とは、言うならば他者の身体なのである。「私」は自分の身体を、他者の身体を通すことによってより明確に把握する。自分で思っている「私」の対自の身体は衣服という対他の身体によって、その「いびつ」さを表すのである。そうした衣服と身体の関係においても、人称の混在は生じるのだ。次の引用は、「私」が自分の部屋から持ってきた衣服をピンクの娘が着る場面である。この箇所も地の文であるが、一人称に〈僕〉が使われている。この〈僕〉という人称は、米軍ジャケットとジョギング・シューズという衣服に掛かっている。

娘は雨合羽と長靴を脱いで、僕の持ってきた米軍ジャケットとジョギング・シューズに着替えた。「あなたも着替えたほうがいいわよ。今から行くところは身軽じゃ

ないと通り抜けられないから」と彼女は言った。（第21章）

服とは、体に触れ、それを覆うことから、「私」の身体の一部でもあるものだ。服を着るとは、他者の身体を身にまとうこと、つまり、自分ではない誰かになることである。服を着るとは、そのまとった他者を揺さぶり、他者と自分との境界をあいまいにすることでもある。「私」の米軍ジャケットが、ピンクの娘という他者に着られることで、「私」の身体に他者の身体が潜在するのだ。「私」とピンクの太った娘は、地下世界を降りていく途中で一度だけ抱きしめ合った。「私」の生活の匂いは、「私」の米軍ジャケットに残っていて、その匂いはピンクの女の子の匂いと混ざり合う。

彼女の首筋からはメロンのオーデコロンの匂いはもう消えていた。そのかわりに十七歳の女の子の首筋の匂いがした。首筋の下からは私自身の匂いがした。米軍ジャケットにしみついた私の生活の匂いだ。私の作った料理や私のこぼしたコーヒーや私のかいた汗の臭いだ（第21章）

「私」は、ピンクの女の子の身体を通じて、「私」の生活の匂いを確認することになる。自分の匂いとは、普段では意識しないものだ。他者の匂いがあることで、自分の匂いもより鮮明になるのだ。「私」の米軍ジャケットを着たピンクの女の子は、「私」の身体にイメージを新たに与えてくれる。他者の身体に「私」の体の影が宿ることで、他者の身体との境界が揺らぎ、ここでも一人称が混在する。人称の混在は、「私」がそれまで意識しなかった身体、そのイメージのずれを示す。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕における語り手**「私」**の一人称の混在は、何を意味していただろうか。人称の混在は、語り手**「私」**の身体への対自と対他の差異を表していた。「私」がイメージしている身体から逸脱し、「私」が所有していなかった新たな身体のイメージは、「私」の身体をより複雑なものとしていく。「私」の身体のイメージに、他者を通すことで知ることのできたイメージが加わり、その輪郭がより明確になる

のだ。

三、唄に揺さぶられる世界の一人称

〔ハードボイルド・ワンダーランド〕における一人称の混在を見ていくと、語り手**「私」**の身体表現とかかわる場所に生じていることが分かる。一人称と同様に、身体のイメージも他者との関係によって成り立つものだ。一人称は、その使用者の社会的意識を反映したものであり、自分が何であるか、他者からどう見られるのかを意識して使用するものである。同じように、自分によって把握する身体（対自身体）だけではなく、他者にどう見られるか（対他身体）という複数の側面から身体のイメージは成り立っているのだ。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の世界での一人称の混在は、公私の境界、自己と他者の身体境界を揺るがせるものであった。それを踏まえ、もう一つの世界である〔世界の終り〕について一人称と身体の関係を考えてみたい。〔世界の終り〕の語り手は、一人称〈僕〉を使う。〔世界の終り〕の語り手を、語り手**「僕」**と呼ぶこととする。語り手**「僕」**の一人称は、地の文、会話文のどちらも同じ〈僕〉が使われ、そのモノローグ的世界にはどこにも亀裂がないように見える。

> 僕は黙って首を振る。（中略）「僕はただこの街のことを知りたいだけなんだ。この街がどのような形をしていて、どのように成り立っていて、どこにどんな生活があるのか、僕はそれが知りたいんだ。何が僕を規定し、何が僕を揺り動かしているかを知りたいんだ。その先に何があるのかは僕にもわからないのさ」（第12章）

〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の語り手**「私」**は、その一人称を地の文／会話文で変えていた。読者に対する自己意識が複数の人称の使用として表れたのだ。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の語り手と比較すると、〔世界の終り〕の語り手は、読者に対する自己意識は希薄である。地の文／会話文ではどちらも一人称は〈僕〉であり、読者と登場人物とに対する自己意識の差は見られない。しかし、そのような語り手においても人称が混在している箇

所が一つだけある。次の文章は、「僕」が楽器を探しに森の近くにある発電所を訪ねる場面だ。そこで「僕」は発電所の管理人と出会い、手風琴を見つける。[10] ちょうどその楽器の調子を確かめるところで、地の文に〈僕〉ではなく、〈私〉という一人称が混在するのである。

僕は蛇腹を左右にのばしたり縮めたりしながら、下の方からキイを順番に押さえてみた。キイの中には小さな音しか出ないものもあったが、一応きちんとした音階になっていた。私はもう一度上から下に向けてキイを押してみた。（第28章）

どうして〔世界の終り〕ではこの箇所で人称が混在しているのだろうか。それはこの手風琴の楽器による唄こそが、「僕」に他者の心を発見させるきっかけとなるからである。〔世界の終り〕では、「僕」は心を失ったものとして書かれる。「僕」が「夢読み」の仕事をしながら、自分の失った心を探し出すことを主軸に物語は進行していく。その過程で「僕」は、図書館の女の子が失った心を、手風琴の唄を通じて見つけるのだ。「僕」がその彼女の心を見つけると、古い夢をためてきた一角獣の頭蓋骨が輝きだす。

僕は最後の灯が見えなくなってしまうまで、頭骨の上に指をすべらせ、そのぬくもりを体の中に浸みこませた。（中略）僕の中にしみこんだ彼女の心が体内を巡り、そこにある様々な僕自身の事物と混じりあい体の隅にまでしみわたっていくのが感じられた。（中略）そして僕が彼女にそれを伝え、彼女の体にしみこませるにはもっと長い時間がかかるだろう。（第38章）

〔世界の終り〕は、病気も争いも老いることもない不死の世界として書かれているが、そのような街の中でも、「僕」は「心」を感じ取る場所として身体を見いだす。その過程で、「僕」の中に他者の心が入りこみ、その「僕の体」の中にある他者への実感が書かれているのだ。[11] 「僕」はそれまで、夢読みをしてもその夢を理解することはできなかったが、唄によって、「僕」は彼女の心を見つけることができ、その心を自分の「体」を通すことで感じ取ることがで

きたのだ。唄と身体の関係について、鷲田清一は次のように述べている。

歌うこと、それはわたしが別のだれかに、ある意味内容をもったメッセージとか情報とかを伝えることではない。〈わたし〉という人称のなかに閉じこもったふたりが向きあうことではない。それは、わたし、あなた、かれといった人称の境界をいわば溶かせるようなかたちで、複数の〈いのち〉の核が共振する現象とでもいうべきものだ。あるいは、現象学者、メルロ＝ポンティの言いまわしを借りて、「〈わたし〉よりももっと古いわたし」たちがその身体ごと共鳴する現象といってもよい。[12]

歌(唄)を通じて他者と自己がその境界を越えて身体で交わり、その時、「僕の体」は「僕」だけのものではなく、複数の〈いのち〉、つまり〈人称〉が混在する場所である。〈僕〉の中に、〈私〉として揺らぎが出ているのは、固定した人称の関係ではないような、人称の境界を超えるような身体が生じてきているからである。人称の境界を越えさせるような唄のきっかけとなる楽器にふれたことで、他者を感じるための身体が呼び起され、「僕」の身体における複数の自己、つまり他者との関係が、〈私〉という異なった一人称で表れたことを示しているのだ。一人称を通じて、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕と、〔世界の終り〕の二つの世界は、関連する。36章の〔世界の終り〕でダニーボーイを唄ったことは、37章〔ハードボイルド・ワンダーランド〕にも頭骨の発光という形で影響を与え、二つの世界はリンクする。

とにかくテーブルの上でクリスマス・ツリーのように光っているのは私が持ってきた一角獣の頭骨だった。光が頭骨の上に点在しているのだ。（中略）怖くはない。それはおそらくどこかで私自身と結びついているものなのだ。（第37章）

二つの世界をつなぐものこそ唄なのであり、唄によって〔世界の終り〕の「僕」の一人称に〈私〉が混ざることは、

「僕」が失った記憶である〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の「私」を、身体が思い出したということではないだろうか。唄だけではなく、人称の揺らぎによっても二つの世界の境界は揺らいでいくのだ。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』には、一人称による境界とその揺らぎが書かれており、その揺らぎは身体の輪郭を揺さぶり、二つの世界をつなぎ合わせるのである。

おわりに

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、〈僕〉と〈私〉によって二つの世界が分かたれているだけではなく、〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の中だけで、地の文と会話文での〈僕〉と〈私〉の使い分けがなされている小説であった。一人称は自己を他者に対して、いかに表現するかという意識を表す言葉である。この小説は一人称の公私の使い分けを用いることで、語り手の他者意識を書きだしたものなのだ。〔ハードボイルド・ワンダーランド〕の語り手**「私」**は、計算士という『組織（システム）』に属する公的な面を持った存在である。そうした計算士として語る自己＝〈私〉が、読者へと向けられた面だったのだ。会話文と地の文とで使い分けられた語りは、語り手「私」に奥行きを与えている。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における一人称の使用は、小説中の身体表現と密接に関係している。一人称と身体をつなぐのは他者への意識だ。一人称も身体、他者を通じて成立する表現なのである。地の文における〈私〉ではなく、〈僕〉が使われているように、それまでの一人称の使用から逸脱する表現は、「私」の身体表現に関するところで表れる。「私」の身体におけるイメージのギャップを意味し、「私」の身体に潜む他者を露呈させ、自己と他者の錯綜した関係を表現している。また、〔世界の終り〕においても唄によって、地の文でそれまで使われていた〈僕〉ではなく、〈私〉という一人称が混在する。二つ世界を分けるだけものではなく、つなぐものが〈僕〉と〈私〉の一人称なのだ。

村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、他者意識を二つの一人称〈僕〉と〈私〉を用いて書かれた小説であり、それは同時に身体に根差す他者を

一人称により表現することでもあった。他者への意識によって揺れ動く自己を、小説の構造として一人称を用いることで書いたのが『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』なのだ。

［注］

1　風丸良彦『越境する「僕」』（二〇〇六・五、試論社）、佐々木敦『ニッポンの文学』（二〇一六・二、講談社現代新書）

2　仁田義雄「人称」（『日本語学研究事典』、二〇〇七・一、明治書院）

3　石黒圭『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』（二〇一三・五、光文社新書）

4　例えば、竹田清嗣『〈世界〉の輪郭』（一九八七・四、国文社）や、西田谷洋「システムと責任―『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の構造―」（『国語国文学報』第六八集、二〇一〇・三）などが、二つの世界を「私」／「僕」の世界として意味づけている。

5　章ごとに複数の一人称を使ったことについて、村上春樹は「二一人称の機能の限界を打開しようという試み」であったと述べている（『職業としての小説家』、二〇一五・九、スイッチ・パブリッシング）。

6　ジェイ・ルービン『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（畔柳和代訳、二〇〇六・九、新潮社）、最近のものとしては、徳永直彰「村上春樹作品における一角獣表現：『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を中心に」（『埼玉大学紀要　教養学部』第51巻1号、二〇一五・一）による指摘がある。

7　石出靖雄「地の文と発言の関係」（『漱石テクストを対象とした語り言説の研究』、二〇一六・一、明治書院）

8　鷲田清一『顔の現象学　見られることの権利』（一九九八・一一、講談社学術文庫）

9　市川浩『〈身〉の構造　身体論を超えて』（一九九三・四、講談社学術文庫）

10　『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、一九八五年の初版版に村上春樹による修正が加えられた形で一九九〇年に出版された『村上春樹全作品　1979～1989〈4〉』に収録された。〈私〉と〈僕〉の一人称の混在は、全集版のものでも変わってはいない。しかし、初版版では主人公の「僕」だけではなく、発電所の男にも一人称の混在が一か所だけ

見られたが、全集版では、その箇所は修正されている。つまり、再録する上で「私」と「僕」における一人称の混在のみを残したのではないかと考えられ、村上春樹にとっては、この「僕」の人称の混在が重要であったことがうかがえる。

11　浅利文子（『村上春樹 物語の力』、二〇一三・三、翰林書房）は、そのような「僕の体」について、「身体の奥底から湧き上がる音楽であり、音楽に共振する身体であった」と述べている。

12　鷲田清一『「聴く」ことの力』（二〇一五・四、ちくま学芸文庫）

※本文の引用はすべて『村上春樹全作品　1979〜1989〈4〉』（一九九〇・一一、講談社）による。

※本論稿は二〇一六年九月四日に行われた「三大学（中央大学・日本大学・早稲田大学）合同セミナー」での発表内容をもとにまとめたものである。ご助言いただいた先生方、参加者の皆さまに心より深謝申し上げる。